

随筆集

これまぶとこれから



兵庫県知事

井戸敏三

随筆集

これまぶとこれから

兵庫県知事

井戸敏三

はじめに

自分や家族のこと、そしてその周辺の出来事などを書いたりするのは何かと気恥ずかしい。しかし、そこにはその人のありのままが見れやすいので、何か本人からすればそれが恐ろしい。

これまでも自分自身の歩みを時々書き続けてきたが、生い立ちや家族、そして周りとの事々など、これまでを振り返ってみるとも今では何かふさわしそうな気がして少しピックアップしてみたのがこれである。自分史や自分像が少しでも見えればと願っているが、高望みであろう。

今年の新年は世界中厳しきで覆われながら迎えた感がある。しかし、このような時だからこそ、少なくとも自分は元気で希望を忘れず本分を尽くすと新年だけに決意している。自分を忘れずし

かも客観的で活動力を持って、真正面から事に当たりたい。不為也、非不能也。これこそが本意である。

これからどうなるかは予測できないが、このような決意があつてこそ拓いていけるのではないか。そのために「これまでとこれから」を題としてみた。これからは、時代の動きに即しながらこれまでを生かしつつ、全力で事務にあたり、皆様のご指導を仰いでいくしかない。そう覚悟している。

雪光る 富士の雄姿が どっしりと

年の初めに 励ましもらう

平成二十一年 正月

井戸敏三

●目次●

第一章 私と家族

父のこと	8
わが家族	15
わが還暦	18
続 わが家族	21
名前	25
運転免許	27
霞城会	29
父の病気	31
保険代理店	33
仕事	35

第二章 ふるさと播磨

新しいふるさと	40
故郷とのつながり	48
姫新線に乗って	50
思い出いつぱいの故郷	53
同級生交歓	56

第三章 やすらぎ

タウンウォッチング	60
私のベスト3	65
桜花あれこれ	67
九回目の六甲縦走	70

第四章 つれづれに想う

二十一世紀を生きる君たちへ	80
三世代社会	90
同じと違い	95
最近の歌に	98
晴れ男	100
さわやか街頭トーク	103
始球式	108
健康法	111
月への思い	114

● 第一章 ● 私と家族

父のいふ

私の父、井戸省三は大正十一年六月十日生まれである。「時の記念日」生まれらしく、たいへん真面目、几帳面な人であった。それでいて、明るく、快活、積極的かつ人情にもろい人でもあった。それは播州人としての特質でもあろうが、また、彼の生い立ちにもよるのだろう。

私の祖父母は私の生まれる前に亡くなっているので、私は祖父母を知らない。祖父は、ある程度の田畑を持ち、曾祖父から引き継いだ醤油製造業を営んでいたが、あの昭和の金融恐慌の時、自分たちが出資していた銀行が倒産し、そのためかわずかの貸家も失い田畑も大半を手放さざるを得ず、零落したという。その失意の中で亡くなっただらしい。祖母は、多くの子供たちを育てながら、祖父の失った田畑を少しでも自分

の子の時代に回復してくれることを楽しみにしながら子育てと生活維持に努めたのである。あの終戦の一年程前に世を去った。その間、期待していた長男を亡くし、やはり結核で嫁に出した娘も亡くなるなど苦労の連続だったらしい。このような厳しい状況が父の子供時代だった。祖母の唯一の喜びは、亡くなる直前に父と母が結婚してそれなりに安心できたことだったのかも知れない。

父は、新宮高等小学校から普通中学校へ行きたかったし、先生からも進学を勧められたが、祖母から「家作（貸家）を売って学校に行くなら行きなさい」と言われて断念したという。今から思えば、父が、貧しく、厳しい経済状況の中でも、私を含めた三人の兄弟を大学まで進学させてくれたのは、このような悔しい思いが支えになっていたからではなかったか。

戦時色を強めた時代であっても、当時の普通の子供の就職先として、大阪へ働きに行かされた。幾つかの職についたらしいが、私たちに語ってくれたのは、お菓子屋である。和菓子を製造するよりも、ご用聞きに阪神間のお屋敷を歩いていたらしい。職業のスタートが営業であったことが、その後の父の職業選択を規定したのだと思う。

一貫して商いの道をめざしていたのだから。しかし、羊羹はよく作ってくれた。見よう見まねだったのだろうが、おいしかった。

戦争中、故郷に帰り、日本通運に勤務していた。母とのなれそめもこの時で、昭和十九年に結婚している。その後、徴兵、名古屋で終戦を迎えた。結核にかかり陸軍病院に入院中のことだった。子供の頃の思い出では、アスピリンの白粉が瓶に一杯詰まっっていて、風邪などで熱が出ると飲まされた。今もあの舌にのせた時のピリツとした苦みを思い出す

私が生まれたのは、昭和二十年八月十日、終戦直前である。それでも五日前であるので、私は戦中派だと称している。名前は、父が出征中であつたので、長男であるにも拘わらず、母方の祖父が、省三の一字をとって敏三と名づけたと聞いている。名前というものは、自分でつけられないだけにこんなこともエピソードである。

戦後は、日本通運を退職して、復興期に、商売というよりも自分で、東京、横浜に材木を移出する仕事をしていた。結構成功して、当時の写真を見ると、仲間と国内旅行をしたり、生け花を習ったり、町内会で活躍したり、活発な動きをしているのが窺える。

しかし、ようやく戦災復興が軌道に乗り、大都會での住宅再建も一定の秩序が形成されてくると、系列外の一匹狼ではどうしても無理があるのか、事業がうまくいかなくなったようだ。というのも、私の記憶では、この頃仕事をしている父が思い出せないのだ。しかし、絵のかき方や本の読み方を幼稚園の頃によく教えてもらったことを覚えていて。

横浜に生活の本拠を移すことにしたのも、このような事態を打開したいとの願いと、東京、横浜という大都市の復興の中で、自分の力を試してみたいとの思いからであったろう。田畑と先祖伝来の家、当時わら屋根であったが、完全に引き払って一家で引越したのは昭和三十年であった。最初は、横浜のある建設会社の経理兼営業で、その後自分で仕事を始めた。従業員一人の零細企業である。

昭和三十年代、もはや戦後ではないといわれた時期ではあったが、事務所兼自宅の前の第二京浜国道も舗装工事中であり、東京オリンピック前のまさしく激動の時代であった。それだけに弱小の材木屋にも小さな工務店や大工さんたちが付き合ってくれていた。しかし、弱小零細であるだけに、資金繰り、顧客の倒産、そして問屋への対

応、銀行との折衝、材木の配達・手配などに追い回されていた。事務所と自宅が一体であるだけに、子供たちにも父母の苦勞がよくわかった。それだけに手伝いはよくさせられた。ご存じであろうか。サイドカー（自転車・オートバイの横に荷台がついた運搬車）での手伝いは、慣れないと荷台の方が重いのでハンドルをとられてしまい真っ直ぐに走っていかない。サイドカーとはまさによく言ったものだ。

また、東京オリンピックの頃に私も自動車運転免許を取得したが、いすゞ自動車のエルフという荷台三方開きの二トントラックを使って、東京の木場や川崎の木材市場に木材の引き取りに通った。荷台の重みからハンドルの切れが悪くなり、カーブが切りにくくなるので細心の注意が必要であるし、転倒の危険もある。私の学生時代のアルバイトは家業の手伝いだった。

父はよく言っていた。商売はお客さんが来てくれて初めて成り立つもの、お客さんが苦しい時にどれだけ一緒になれるか、協力できるかが基本、だからたとえ不渡りをもらってもよく事情を見極めてできるだけ待つてあげる、支援することがまた次の商売につながるっていくと。したがって、父の自慢は、不渡り手形の束。十数センチにも

なるが、これを私たちに見せながら苦労話をするのであった。

昭和四十年代に入って、材木の取引に加えて損害保険の代理店、そして貸ビル業も営むなど仕事の幅を広げた。ビルの建設も、事務所兼自宅の敷地、たかがしれているところに五階建てを建てたのだが、資金手当てには随分苦勞したし、それこそ材木の取引先の数人かに大変お世話になったらしい。今も母が一人でビル管理と経営をしているのだが、エレベーターもない旧式ビルがいつまで経営できるか、そろそろ皆で検討しなくてはならない時期になっている。今は亡き父ならばどうするのだろうか。

戦後日本の復興期を走ってきた父の個人史をなぞってきた。貧しい少年時代、苦しい青年時代、波瀾万丈の壮年時代、落ち着いた晩年と、父は父なりに自分に忠実に生きてきたのだろう。顧客との取引にしても資金繰りにしても誰にも相談できず自分一人で決めざるを得ない、全く自己決定と自己責任の世界だけで生きてきた人であった。今思えば、もっと手助けを、心からの声援を、共感を送れば良かったなと思わないでもない。あれだけ元気で、積極的で、快活で、おしゃべりだった人が、晩年はベッド暮らしになり、私たちのたまの見舞いに涙していただだけに、よけいに反省させられる。

父の基本姿勢は「誠心誠意」であった。相手の立場に立って誠意を尽くせば、必ずわかってもらえるということ、これを実践していた。それは、数々の苦労や試練の体験の中から身につけたものであろうが、人と人とのつながりを大切にしたからである。それを私たちに言うため、父はよく、小学校時代の教科書にあった一節「ポチは縁の下から出てこない」を例にあげた。いくら呼んでも縁の下から出てこない犬、叱っても叱っても出てこない、餌を持って行っても出てこない、花子さんが「ポチ、ポチ」と言うと、やっと縁の下から出てくる。この話を引き合いにして、犬のような動物でも愛情や信頼がなければ応えてくれないのだから、ましてや人間と人間との付き合いにおいて、相互の信頼関係がなければならぬのは当然であると言っていたが、これこそ自分自身の信念であったのだろう。

私の家の居間に額がかかっていた。父が誰に書いてもらった書かは知らないが、自分の心の支えとしていたのだろう。「努力」父らしいモットーである。今はもういない。

(平成十三年六月)

わが家族

わが家は、男女共同参画を通り越して女性中心である。女性中心社会こそ、あの卑弥呼の時代がそうであるように、世の中に争いのない平和の時代であるといわれる。まさしくそのとおりの状況である。

わがパートナーは玲子。私と一つしか変わらないのに、私の髪が少し白いこともあって、二人並ぶと比較的若く見えるらしく、そのことを周りの人から言われると喜んでくれる。桐朋の音楽教室でバイオリンを教えている。幼児の音楽教育が専門らしい。というのは、私は全くの音痴で、カラオケにもなかなか乗れない。音楽的素養や才能に恵まれていない、まさしく門外漢で音楽を評価できないからである。もう一つ、引越しの専門家である。私の勤務の関係で全国を動き回ったこともあって、二十回近く

の経験を積んでいる。引越し業者顔負けである。

また、彼女の母がリュウマチで大変不自由なため、神戸と東京を行ったり来たりと、なかなか多忙である。が、私には手がかからないだけ助かっているのではないかと思ったりもしている。

わが家には娘が二人いる。長女は柄里。九州の佐賀に在る頃に生まれた。「えり」と読む。里をともにすることができるようにと名づけたが、どうもそうではない。母親の跡を継いで桐朋学園に学び、バイオリニストである。NHK交響楽団の一員として、淡路の津名町や神戸に来たこともあるが、今や全くのフリーで活動している。音楽という自分の世界を持って、早くから自立しているともいえるのだが、私からすれば、行動的であるのはいいのだが、少しは落ち着いてもらいたいというのが本音である。

もう一人の娘はアニー、わが家の次女である。イギリス原産の、キャバリア・キングチャールズスパニエル、すなわち雌の愛犬である。「アニーよ銃を取れ」という有名なミュージカルから名づけた。活発でよくなついてほしいと思っただけだが、まさ

しくべたべたである。散歩係は私に決まっているので、帰宅時間になると玄関で待ちかまえている。洋服を着替えてくつろぐとうすると「ワン、ワン」―連れて行けと催促する。夜は夜で川の字で寝る。出かける時は、「お留守番」と声をかけないと、私もとという風情で落ち着かない。しかし、朝背広で出かける時は知らん顔。よくわかっているのだ、やっぱり。とても人なつっこい娘である。ただ、犬の年齢の一年は人間の年齢では六年程度に相当するといわれているが、彼女はもう十二歳、相当の高齢である。最近は散歩もままならないので、いつもぐうたら寝ているのではないかと心配しているところである。

わが家の家族の悩みは、それぞれの生活パターンが違っているためなかなか一同が集まった共通の時間を持ちにくいことである。「一家団欒」が実現するのはいつのことだろう。まあしかし、それなりに安定しているから不思議なものだ。

(平成十三年六月)

わが還暦

わが家族も毎年一歳ずつ年をとる。それがやはり変化をもたらすことになるのは自然のこと。私だって還暦を過ぎもう三年も経過した。還暦と言えば、私の子どもの頃のおじいさんやおばあさん達は本当に爺婆然とされていたのではなかったか。記憶ではそうである。それも当然、平均寿命が戦後六十年で三十歳延びているのだから還暦などはまだまだ準現役、古希という七十歳を表す言葉も色あせて七十歳の人など世間にもどこでもごろごろしておられるようになっていいるのだから、今時の還暦が至極当たり前にもう一度スタートラインに返って再出発すると感じるのだろう。

私の還暦は相当劇的だった。私は一般に言われる赤い帽子やちゃんちゃんこだけは着るまいと固く誓っていた。それだけに、ちょうど六十歳を迎える瞬間が、たまた

ま兵庫県と友好州であるブラジル・パラナ州との友好四十周年記念式典のためパラナ州を訪ねていることもあり、何事もなく自然に迎えられるものと考えていた。パラナ州の州都はクリチーバ、姫路の姉妹都市である。都市の再生を「環境都市」として緑豊かな公園を中心とする都市デザイン、車を極力排除した地下鉄網のようなレールバス網の都市交通、特産物等スローライフ志向などで名高い。ここを私の誕生日、八月十日に訪ねた。夜は、クリチーバの日本ブラジル協会主催の歓迎レセプションであった。私自身の誕生日とは承知していたが、他の方々が承知されているなど思いもしなかった。歓迎会が始まって何人かの挨拶の後、恒例により乾杯が行われるが、すぐに音頭にならない。「変だな」と思っていたら、「今日は井戸さんの誕生日の八月十日です。しかも還暦を迎えられました。みんなでお祝いをしましょう。」という紹介があり、赤い帽子とちゃんちゃんこが持つてこられて否という間もなく、着せ、かぶせられ、お祝いの祝福を受けることとなってしまった。しかも記念品には真っ赤なチョッキをいただいでしまったのだ。

地球の反対側のブラジル、クリチーバで日系人三百人ほどのパーティーでこんなに

大勢の方々から還暦の祝福を受けるなど想像もしていなかっただけに感激したことか、感無量、言葉も出なかった。日本にいたら、せいぜい家族が祝ってくれただけだったろうから。

ブラジルは、日本よりも日本の文化や伝統が生き続けていると言われてきた。まさしく、還暦という人生にとって一つの大きな節目を経る人に対してこぞって祝福し、さらなる活躍を祈るといふ伝統が実践されていた。多くの人々のやさしい、愛情ある、しかもこれからの期待や第二の人生への励まし、そして何よりも生きてこそその人生との願いを感じることができた。うれしかった、楽しかった、やる気になった、そしてなによりも感謝したかった、感激した。そういう還暦を迎えたのだった。

そして、もう三年がたった。今年、移民百周年で再びブラジルを訪ねることができた。あの時の感謝や感激、決意を奮い起こしていかねばならない。六十三歳になったのだから。

(平成二十年十二月)

続 わが家族

わが家族も大きく変わってきている。何よりも、次女として紹介したアニーが平成二十年一月に逝ってしまった。あと一月ちよつとで十八歳だったのに、少し早く逝ったことになる。しかし、ドッグイヤーといわれるように人間に換算すれば六か七掛けであるから、仮に六掛けでも百歳程度生き抜いたことになる。

昨年の八月頃から元気がなくなり、本格的な医者通いをせざるを得なかった。すでに乳ガンの手術をしたり、卵巣腫瘍の摘出をしたり、頑張ってきていたのだが、目も衰える、背骨が曲がって下向き姿勢になる、足が衰える、食事が進まない、尿が出ない腎不全など、老衰現象が見えていた。平成二十年の正月日前などは点滴のため入院していたのだが、私を始め家族とお正月を迎えることとして、少し無理矢理だけど退

院して、お正月を迎えたものだった。

犬でもおむつをするのをご存じだろうか。アニーはこの半年はおむつがはなせなくなっていた。しつぽに穴が空いた機能的なおむつである。トイレ場所のそばまで行ってもその近くにお漏らししてしまう。進んで水を飲む元気もなくなる。大きな注射器で水を満たして差し込んで飲ませる。まさしくアニーの介護を家族ぐるみでしていたことになる。しかし介護の先は、悲しい別れであった。

アニーの兄弟姉妹は四人ならぬ四匹で、アニーは三番目だったが一番長寿だった。他の兄弟姉妹は、十二歳前後で亡くなっていたから、アニーが特別元気だったのだから。秘かに私が誇っているのは、本当に小さい頃から、生まれて三月後ぐらいからだろうか、散歩に連れ出していた。皆から「かわいい犬ですね。」と尋ねられるたびに「アニーといえます。ほら『アニーよ銃を取れ』のアニーです。キャバリアです。」と答えたものだった。このような毎日の一時間ほどの散歩癖が健康体を作ったのかも知れない。

今は遺骨となってわが家の仏壇横にいるが、きつとお散歩お散歩と要求しているのかも知れない。ありがとう。

そのアニーが次女とすれば、三女とその娘がいる。最近人気の高い小型犬といえば、

トイプードル、チワワ、ミニダックス、シーズー、パピヨンなどがあるが、わが家の家族はヨークシャテリアである。三女のペコはまさしく神戸生まれの神戸育ち。家族になったのは七年前であるが、養女にもらわれてきた。前の飼い主がキャバリア犬と過ごすこととなり、しばらく一緒に生活していたのだが、どうも生活が合わなかったらしい。ご本人とも新しくきたキャバリアとも。そのため、知り合いで犬大好きのわが家に養女としてくることになったのだ。しかし、本人ならぬ本犬は大変なお家柄、血統書付きのチャンピオン犬のお嬢だった。それだけに気位が高かったということか。人にこびたり甘えたりおねだりしたりしない、いわゆるかわいくない性格だった。しかし美人いや美犬である。よくある話ではないか。わが家の一員となつて、最初は少し偏固なところがあつたらしいが、徐々に慣れて、とても活発な犬となつた。しかし、時々いじけた。私などをフンと無視することもある。美犬は扱にくい。

その娘がエメ。親に似て本当に活発。行動的で何事にも好奇心が強い。椅子やベッドにも身軽に飛び乗ってくる。ボール遊びなども大好きだ。犬にも想像妊娠があるの驚いたが、一時つわり現状を起こしたので、さてお目出度と喜んだが、全くの嘘、

しかし本犬は食事などもすっかり妊犬状況だったのだからおもしろい。

神戸のハーバーランドを長女の柄里が連れて歩いていたら、モデル犬となってほしい、写真を撮らせてほしいと頼まれたことがあったらしい。いわゆるスカウトだ。写真写りはお母さんのペコの方が良いが、娘エメも負けていないらしい。カレンダーに三年続いて載ったりした。美人ならぬ美犬の故であるが、元の飼い主さんには感謝感謝。

その三女ペコも今年で十歳、娘のエメも六歳を迎える。さてさて、我が家族も年々歳々花相似たり、年々歳々同じからず、の実情にある。

次に報告するときには、どうなっているだろうか。

(平成二十年十二月)

名前

私の母は今年八十歳になった。傘寿の年を迎えたことになる。現在、横浜市の住宅地に一人暮らししている。今のところ元気でやっている。またそう願っている。仕事を控えながらだから、何かやっつけられるからリズムがあつてよいのだろう。

私が今年六十歳、還暦を迎えただけに結構若い母親だったことになる。戦争中のことだけに、といっても、私の誕生日は八月十日、たった五日間の戦中派である。長男だったのに「敏三」と三が名付けられているのは、父が徴兵で陸軍に召集されていたため、祖父が父の名前を一字とって名付けたという。よく三男ですかとか三番目ですかと問われたとき、いえ、長男なんです、と答えるといつも怪訝な顔をされてきたが、こんな事情がある。

私は、当時のことだから、自宅で助産婦さん、当時は産婆さんといっていたが、に取り上げてもらった。衣笠さんという方らしい。二、三年前、同じ生まれ地の衣笠さんという私の小学校の同級生のお母さんが叙勲の栄に浴されたとき、同じ「衣笠」でもあるので、私の取り上げが同級生のお母さんの衣笠さんではないかとの情報が乱れ飛んだので、母親に確認したところ、人違いであったことがはっきりした。そういえば、私も横町の同級生のお宅によく遊びにいったが、私も取り上げたよと言われたことがなかったと思う。六十年近い時間の中で、愉快な取り違いが生じたものと楽しいエピソードとなった。

今また、助産婦さんが注目されている。何も産婦人科医不足ということだけではなく、病院での出産が普通になって在宅での出産がほとんどみられなくなっていたが、助産婦さんのトータルケア、即ち妊娠中の健康管理、出産、そして出産後の回復期を通じて指導や療養を施す役割が評価されつつあるからだ。助産婦さん、看護師さんと産婦人科医師や小児科医師とのチームプレーにもっともっと期待したいものだ。

(平成十七年十月)

運転免許

私の運転免許証では普通自動車免許と自動二輪の免許と二種類の資格を持っていることになっている。私自身、しかし、二五〇cc以上のオートバイに乗ったことがない。私の運転免許の取得は、昭和三十九年秋、東京オリンピックピックの時だった。東京オリンピックの競技が行われている時は、テレビにでもかじりついて見てしまうから何か身につけることをやろう、自動車学校に学ぼうということを通じていたのだった。そのころは、普通自動車免許を取ると自動二輪免許も交付されることとされていたため、今も自動二輪の免許保有者となっているにすぎない。

大学一年の秋に自動車運転できるようになると、私も二トトラックの運転手として東京深川の木場や川崎の木材市場から横浜まで材木を積んで運んだものだ。木材運

搬用の荷台が三方に開き、平らになる仕様車に、積載して運転する。この運転にあたって気をつけることは、ブレーキがまず重い、加速度がついてるので利きにくくなること、カーブを曲がる時には荷台の荷物のため左右に傾くので急カーブは絶対に禁物であること、運転台が高いので正面は見易いが左右の脇、特にオートバイが見にくいので注意の要があることなど、それなりに注意していた。積み下ろしの時に、材木、柱や板を肩に担いで作業したものである。長尺もの（二階まで通ずる長柱）は担ぐ時にコツがあつて、角度をほどよく持つ必要がある。バランスが大切なのだが、今でも右肩が左肩より上に出ているのは、このようなアルバイトのためである。右手が左手より1cm長いのもそうである。不便なのは、洋服はぶら下がりが合いくいとカワイシャツの左右が合いくいとあるが、たいしたことではない。

しかし、一つの勲章である。そう思っている。

（平成十七年十月）

霞城会

母は、旧制龍野高等女学校の卒業生である。旧制龍野高女は西播磨では名門校であつたらしい。卒業生の方々は全国各地に散らばつていて各方面で活躍されている。

しかも戦後旧制龍野中学校と一緒になつて新生龍野高校となつてから同窓会も一体化し、「霞城会」として、同窓会活動が展開されている。東京でも、毎年、開かれていゝるらしい。母も友人とできるだけ出席しているらしい。友人とは、鎌倉、埼玉、千葉などに点在されているとのこと、ご縁はあるものだ。平成十七年の大会には、大長老として龍野商工会議所相談役の浅井博さんもご出席され、挨拶したと言つていた。

このたびの私の知事選挙でも、この霞城会メンバーを中心に本人も随分働きかけてくれたらしい。多くの方々から「お母さんがおいでになりましたよ」とか、「お母さん、

お元気ですね」とか、「もつと大事にしてあげてくださいね」とか声をかけられた。選挙という特別な活動ではあるが、親心こそ本当に有り難いものと、このようなお声がけにあうたびに感じたものだ。しかし、男子の悲しさ、素直に「ありがとう」と言えないのはどうしたことか。

(平成十七年十月)

父の病気

いくつかのエピソードを紹介したい。父について、今でいう認知症の症状が平成元年頃から始まった。ある時、私が政治資金課長時代だったと思う、母から、「父が行方不明になってしまった。どうしたらよいか」と連絡があった。神奈川県警を通じて横浜市内の警察署等に保護をお願いした。結局、自宅から四km程離れた井土ヶ谷の全く見知らぬお宅に上がり込んで食事をしていたらしい。よく不審者として追い出されなかったことで、温かい対応に感謝したものだ。これから長い戦いが始まったといえる。

私は、このことは一つの人生を象徴していると思っている。子どもの時から苦労して育ち、兵隊にもとられ、戦後一人で仕事を始め、横浜で材木商を営み、最後は小さ

いながらもビルを建てて貸しビル業を行ってきた。一連の苦労の連続の最終段階である安定状態を築くことができた。本人としても木材のような大工さんや工務店相手での不安定、しかも債権額が大きい取引がうまくいかなかったときの打撃の厳しい業務から貸しビル業のように一定の収入が確保され、その採算の中で進められる仕事となり、安堵する、ほっとすることとなったのだろう。その緊張感の喪失が認知症を誘発したのではなかったか。

よく東京横山町の問屋街では、個性の強い、やり手の経営者が引退するとすぐに呆けるといわれていたが、これと同類の現象だったのではないか。ようやく楽になった途端に自分の健康がすぐれなくなる、人生は辛い。

(平成十七年十月)

保険代理店

母の仕事は、火災保険の代理店である。この仕事は木材商時代、工務店や大工さんなど保険を必要とする顧客が多かったことから、火災保険や自動車保険を取り扱っていたが、そのままこの仕事を引き続き行っている。父が健在の時は、大口の運輸会社などとの契約もあつたらしいが、どんどん減ってしまったはずだ。もうとつくに引退しても良いのでは、と思うが、月末になると締めがあるからといって、忙しそうにしている。顧客がどれ程になるのかはわからないが、一人で頑張っているのだから立派なものだ。私も、外国出張の時には電話をかけて即時に加入手続きをとってもらおう。大変安心できる。

パソコンが導入されることになって大変困つたらしい。契約の内容をパソコンに入

力することで、代理店の仲介機能を果たすことになったらしい。従前は、保険会社の支店に契約書を持参するなり取りに来てもらえばその手続きが行えたのに、情報（I T）革命がこんなところまで及んできている。やむなく、だいぶ勉強したらしい。成果はどうか確認していないが、携帯電話の使い方を見ても上手とはいえないのだから、きつと推して知るべしだろう。

一方、各種保険を取り扱うには保険協会認定の資格をとる必要があるらしい。この方は、懸命に勉強して一級だったろうか、もう二十年以上前にとってしまったのだから、やるときはやるのだろう。

もう程々にしたらどうか、とも思いながら、しかし、これが一つの生きがい仕事になつているのかと見守つているところである。

（平成十七年十月）

仕事

私たちは三人兄弟である。男ばかりで、母は娘がいないことに今となっては残念がっていることだろう。毎年正月に母の家で祝膳をとるぐらいしか一同揃うことがなくなってしまうた。

三人とも、結果として父の仕事を継いでいない。父の材木商としての苦勞を見て育ったこともあるのだろう。また、父自身も不安定な職業よりも安定した職業に就かせたかったのかもしれない。私は公務員となったが、下二人は銀行員となった。今では、それぞれ銀行とは異なる仕事をしている。そういえば、子ども心に、父が銀行の支店長さんによくお願いに行っていたこと、ときには菓子折でもことづけていたことを憶えている。銀行の人は他人のお金を預かっているだけでなく、そのお金を貸

すことが仕事、それが私たちの生活を支えてくれているのだということを知ったのだ。これが、私たち三人の将来を決めたのかも知れない。

私もよく、何故公務員になったのですか、と聞かれる。私は当初世界を雄飛する商社マンに憧れていた。それはきつと子どもの頃から商売を見て育ったため、身体に染みついた感情だったのだろう。何故そうしなかったのか。一つは、商社といっても、食品部門、木材部門、エネルギー部門、機械部門など多様な部門に分かれており、一度その部門で仕事をするとほとんど部署が変わることがないと聞いたこと、二つはこれがバイタルだといえるか、英語をはじめとする語学が得意でなかったことにある。

そのため、幅広い分野で仕事ができ、しかも語学に不自由しない純ドメスティック（国内派）である、そして国と地方とで交互に仕事ができるバラエティのある仕事として、自治省に入った。まさしく、いろいろな仕事をする機会が与えられたことは、私にとって大変幸せであった。

その中で、若い頃から中堅職員まで一番長く携わったのが税、特に地方税の仕事であった。消費税の創設でなくなったが、電気ガス税の非課税の洗い直し作業、沖繩の

復帰に伴い本土との制度の調整を図るための沖縄の地方税制の特例、四十年代の地価の暴騰を抑制するため投機的土地投資の抑制をめざす特別土地保有税の創設、五十年代初頭、土地の流動化を促進するための土地税制の改正、所得税の年内減税に伴う住民税の年度内減税の実施、長期税制答申のまとめなど、地方税のいろいろな場面でタッチすることが多くあった。それが、今、政府の税制調査会委員を務めているのだから感慨深いものがある。

今の仕事は、県民の皆様への負託に応える知事の仕事、一層その信頼に応えるべく懸命の努力をしていきたいと固く決意している。

(平成十七年十月)

● 第二章 ●

ふるさと播磨

新しいふるさと

私はよく「ご出身はどこですか」と聞かれる。「兵庫県揖保郡新宮町ですよ」と答える。県外の大抵の人は知らない。どこだろうという顔をされる。「ほら、世界文化遺産で有名な姫路城のある姫路市は知ってますよね」「もちろん」「その隣に龍野市があります。『赤とんぼ』という童謡をご存じですか。その作詞者の三木露風の生まれた町、忠臣蔵で赤穂城明け渡ししの正使脇坂淡路守の城下町ですが、その北側の町です」と言っても、何となくはつきりしないが、位置はようやく兵庫県の西部、西播磨の一面らしいと理解されてくる。駄目押しに、「あの揖保の糸、素麺の産地です」と言うと、やっとわかったようになる。

最も故郷意識が芽生え、発揮されるのは、甲子園での高校野球であろう。甲子園で

観戦するのが望ましいが、テレビで見る一塁側、三塁側のアルプススタンドから繰り広げられる応援風景も、グラウンドでの球児たちの姿とともに、もう一つの甲子園といっても良いほど、それぞれのお国事情が披露される。また、全国の方々がそれぞれの出身地のチームの応援に燃えるのだ。私の場合は、高校野球の出場チームが決まると、応援するチームの順番がこのように決まる。まず第一は、もちろん故郷兵庫の代表チーム、次は、私の勤務した土地で、現在からさかのぼって近い順になっている。静岡、宮城、佐賀、鳥取の代表チームだ。

そして最後は、東京、神奈川つまり自分が住んだ、または育った所である。これだけ応援するチームがあっても、なかなか勝ち残ってくれない。野球王国兵庫の代表チームの活躍を期待しているのは、私だけの願いだではないだろう。

さて、故郷とは、何だろう。国語辞典に言えば、まずは生まれた土地、場所である。これは、何も説明する必要はない。童謡の「ふるさと」うさぎ追いしあの山、小鮒釣りしかの川の世界である。次に、その人の育った所である。その人の人生のスタート、人格形成の基本が形づくられた所である。人は、DNA（遺伝子）によって構

成され、それに規定されているとしても、生まれ育った環境、家庭や地域やそこで営まれた生活や文化などハード、ソフトの全体に育てられる。三番目としては、文化の継承の地である。文化とは過去から現在、そして未来に生きる人に体現されて、引き継がれていく生活様式なのではないか。引き続きそこに住み生活する人を主として、また故郷を離れた人によっても担われている生活様式を象徴している。

私と故郷のつながりはどうか。小学校三年いっぱいまで新宮町で過ごした。昭和二十年から三十年までの十年間である。父は新宮、母は龍野生まれの新宮育ち、両親とも同郷カップルであった。

父から教えられて小学校の体育館で大きな模造紙に機関車の走っている絵を描いたこと。当時の絵の具メーカー「王様クレパス」が主催した写生大会で、龍野ヒガシマル醤油の前の揖保川沿いで揖保川と醤油倉と煙突を描いた絵で金賞を貰ったこと。お祭りの屋台で太鼓をたたいたこと、そのため一カ月ほど練習に努めたこと。お正月のどんど祭、立町の遊び仲間に連れられての揖保川での遊泳、うなぎやなまず捕り。お宮の側の幼稚園、小学校生活など数え始めればきりがなし。春秋の農繁期の休みなど

には、田植え、代掻き、あぜ豆まき、草取り、稲刈り、脱穀など農作業も一通り手伝った。

小学校四年から、父が横浜で材木を扱う仕事を始めることとなり、横浜に引っ越したが、いわば新宮生活の延長といってもよい。食事も母の手料理だから当然播州スタイル。お正月の雑煮が丸もちでお澄ましであるのが基本だし、すき焼きも、まず肉を温まった鍋に入れて砂糖をまぶしてカラメル化したうえで、野菜や豆腐を入れて醤油と少量の酒とともに煮る関西風である。

夏休みともなれば、兄弟三人里帰り。揖保川での水遊び、三石を中心とする大きな岩群付近が絶好の天然プールだったので、大人も子供もここに集まって泳いだもの、岩の壁を利用してターンの真似事もできた。鮎狩りや屋形船にもたまには乗せてもらった。新田山のふもと栗栖川でのカンテラを灯しての夜釣りも、ヤスを持って水面の下で寝入っている雑魚を突くのだ。新舞子での海水浴、遠浅だが、深浅の山谷があって潮が満ちてくると、途中背の立たない谷ができて一瞬溺れるのかなという体験、そして、まだ土地改良の進んでいない時代、足踏み水車をこいだことも。

このように、故郷を離れても、生活スタイルは故郷の伝統や文化に色濃く影響されていた。ただ言葉は、関西アクセントから東京アクセントがいつしか主となっていた。数年前、兵庫県に勤務することになってから、久方ぶりに新宮の町を歩いてみた。姫新線播磨新宮駅を降りる。駅前広場に出てみたらタイムスリップ。駅舎も広場の雰囲気も、あの昭和三十代年の風情をそのままとどめていた。そこから新宮高校の側を通って新田山の墓地へ墓参り、そして横町、立町を通って揖保川にかかる吊り橋の近くまで歩いてみたが、子供の頃のスケールと大人のスケールがこんなに異なるものと実感させられた。わが家から駅まで歩いて二十分ほどかかると思っていたが、せいぜい十分、街中を一周しても小一時間にすぎないことがわかり、故郷のイメージと現実のギャップにも驚かされることになった。

故郷の思い出は尽きないが、故郷にはどうしてこうもメロメロになってしまうのだろうか。

石川啄木は故郷岩手のおいを求めて上野駅に行ったという。

♪ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにゆく♪

故郷は、二つの側面を持つ。一つは、啄木流に故郷を離れた人の想う地、童謡「ふるさと」のバーチャルな世界である。いま一つは、故郷に住み、生活し、本拠とし、自然を守り、文化を育て、故郷そのものを担う現実の世界である。しかし、いずれにしても強い帰属意識に支えられている。自分が、生まれた町、育った町、友だちがいる町、おじさんおばさんのいる町、懐かしさが感じられる町、あの山、かの川からなる環境など全てが自分とのつながりとして感じられるところである。

また故郷には強い継続性がある。「私感覚」といつてもよい。わが町とか、わが村とか、わが家とか自分のもの意識からくる強い愛着であり、それ故に続くスタイルがある。

さらに、いろいろな連帯感を共有している。同じ土地、同じ空気、同じ水、同じ子供、同じ体験、同じ意識から作られる共通感覚。これは過去から今までと時間としての縦軸形成されるものと、同じ地域に生きて共通のイメージをつくる横軸形成されるものがある。歴史や伝統そして文化などの共有意識。一方、町のシンボルを求めて、みんなの共通意識を持つことでつくられる一体感。

そして交流だ。自然や人々や地域や活動などに情や心がかよい合う。これが懐かしさや癒しや共同体意識などをつくる。心のオアシスこそ故郷なのだろう。

このように見えてくると、故郷は、何も自然に恵まれた地域だけでなく、人工物にあふれた市街地でも、そこで生まれ、育ち、生活する人々にとって故郷と思える地となれば、それが故郷なのではないだろうか。兵庫は、多様な自然と文化を持つ個性ある地域、神戸、阪神、播磨、但馬、丹波、淡路を持つ。これらの各地域において、心豊かで美しい地域づくりを進めることができる。

もともと私たちは、花や山川を愛する心から庭づくり、つまり自然を日常生活の中に取り入れて生活してきた。また、床の間には花と掛け軸のように自然を模した庭をそなえて、家の中にも自然を持ち込んでいた。そのような生活スタイルが、いつの間にならなくなりにされてきた。明治以来の西欧に追いつけ追い越せを基本とした近代化路線は、私たちの生活の場から自然を失わせてきたのではないか。今、ガーデンや園芸への人々の関心が高くなっている。幸い淡路花博「ジャパンフローラ2000」も大きな成果をあげたが、人々が、ようやく人間生活が自然とは切り離す

ことができないものであること、日常生活の中に自然との結びつきを求めることが不可欠であること、二十一世紀は、自然の一員としての人間を基本とするべきであること、そのためには私たちの歴史や風土の特性に根ざした新しい生活文化を創造しなければならぬことに目覚めたのではないか。

二十一世紀もスタートした。兵庫に暮らす人々がそこを故郷と思える県づくりを進めなければならぬのではないか。そのことが新しいふるさとを創りあげていくことなのである。

(平成十三年六月)

故郷とのつながり

母は子どもの頃両親を亡くしている。したがって叔母のところまで育てられた。母の父は龍野で写真屋をやっていたという。母の母も龍野高女で一桁代の卒業生だった。

この二人が亡くなり、二人の子ども、母と既に亡くなった叔母の二人が残され、それぞれ親類に預けられた。母は揖保川沿いで屋形船を出す鮎専門の割烹旅館に、妹の叔母は呉服を扱う呉服屋に育てられた。母が育てられた割烹旅館は揖保川沿いにあつたこともあって「浜」と呼んでいた。

子どもの頃、この母の出里はとても大事なところで、時々遊びに行くと、浜のお祖母ちゃんからお小遣いをもらったり、何かとかわいがってもらった。本当のお祖母さん替わりの役割を果たしてもらっていたのだ。

だから、小学校四年生から横浜で生活することとなったが、夏休みは兄弟三人ともこの「浜」にお世話になりながら、揖保川での水泳やお店のお手伝いなどで一〜二週間過ごすことが恒例となっていた。私たちの実感としては、故郷「新宮」は遠く離れた存在ではなく、毎夏を過ごす所、私たちの生活の一部そのものとなっていたといえる。播磨新宮駅を降り立った時、今はロータリーが完成し大きく変わってしまったが、毎年タイムスリップしたように昔ながらの街並みを示していたので、まさしく新宮に帰ってきたという体験を毎年することができた。それだけに、私にとって、副知事、知事と、今、故郷兵庫で仕事をさせていただが、新宮で、毎年、夏の生活を体験することができたので引越し後のギャップをあまり意識しませんでしたのではないかと、兵庫の人意識を失わずにおれたのではないかと考えている。

今も、新宮に寄る時があれば「浜」を訪ねるように心がけている。

(平成十七年十月)

姫新線に乗って

久しぶりに姫新線に乗ることになった。六月某日、龍野の菩提寺で父の七回忌の法事を行うため、本竜野駅まで姫路から利用することになったからだ。姫路までは、新神戸から新幹線で行ったのだが、乗り継ぎさえ巧くいけば鉄道を利用することの時間距離の早さを実感した。だって新神戸九時、姫路着九時十四分、姫路発九時二十六分、本竜野着九時五十一分だから小一時間にすぎない。

姫新線に久しぶりといったが、子供の頃の思い出では、蒸気機関車が客車を引いていた。石炭で水を蒸気にかえ、これを動力として動かしていたから大変だ。トンネルなどでは、石炭の煙を避けるため一斉に窓を閉める。夏の暑い日もそうだ。なぜって、煙が車内に入り、顔をはじめ衣服が真黒になるからだ。現在は、ディーゼル車、もう

煙を気にする必要はない。しかし、何か以前の雰囲気を引き継いでいる。イス席の配置、床や開閉の様子、窓の上下の仕様などまさしくローカル列車だ。二両編成で乗客はイス席に三分の二ぐらい。日曜日の朝の下りとしては普通なのだろう。

本竜野の駅についてので、出口前に行き、ドアの開くのを待っていた。しばらく経っても開かない。変だなと思いはじめたとき、運転士さんがやって来て、手で開けてくださいといわれて、やっと自動ではないことに気づいた。そして、思いこみと習慣とはおそろしいものだと思えて感じた。ドアが自動で開くようになったのは、何年頃のことだったのだろう。私が横浜に引越した昭和三十年代の京浜東北線や東横線はもう自動ドアだったから。しかし、原因は私自身である。ドアの開き口には「押す」という表示がきちんとされていたから、気づかなかった方が問題だ。

また、駅のプラットホームや改札口は昔ながらの姫新線の駅の顔そのものだった。しかし、紫陽花など心尽くしの花や木が心をなごませてくれる。美しい梅雨時の風景だ。のち程お会いしたのだが、たつの市連合婦人会の方々が手入れされておられた。

感謝。

現在の姫新線は課題が多い。もっと利用してもらえようにするためにはどうすればよいか。今、県も地元市町もJRも利用者も住民も含めて検討している。第一は、スピードアップ。最近では電車に近いディーゼルカーがあるので、これを導入したい。第二は、利便性の向上である。一時間に少なくとも昼間二本、朝夕は四本運行されるようにする必要がある。第三は、単線の克服である。単線ではどこかの駅で交互待ちが生じる。行き違いを安全に行える安全側線を新たに設け、待ち時間をなくす必要がある。第四は、利用者確保だ。駅までのアクセスをどう確保するか。駅前広場、バス路線の整備、駅前駐車場の活用など利用しやすい環境の整備だ。ぜひ、姫新線がよみがえって欲しい。

姫新線をはじめに県内の未電化区間や単線区間の鉄道の活用をどうしていくか、県民の皆様と検討していきたい。せっかくの県民の足なのだから。

(平成十八年六月)

思い出いっぱいの故郷

最もこころ安らぐ思い出の場所はどこでしょう。多くの人が「故郷」を挙げるのではないのでしょうか。私もその一人です。

何度も転居する人も少なくありません。私自身、揖保郡新宮町（現たつの市）生まれ、小学校四年生の時に父の仕事の関係で横浜へ引っ越しました。

しかし、今の私に大きな影響を残し、故郷といえるのは、やはり新宮です。それは、単に生まれた地というだけでなく、そこでさまざまな体験をし、多くのことを学んできたからです。しかも、毎夏、横浜から故郷で二週間程過ごしていました。それだけに、「新宮の子」として育ったとも言えます。

だから故郷には、たくさんの体験・思い出がつまっています。小学校の体育館で大

きな模造紙に走っている機関車を書いたこと。絵の具メーカー「王様クレパス」主催の写生大会で、揖保川と龍野ヒガシマル醤油の蔵と煙突を描いた絵で金賞をもらったこと。お祭りの屋台で太鼓をたたいたこと。そのため一カ月ほど練習に努めたこと。仲間に連れられて川での遊泳、うなぎやなまず捕りなど、数え切れない体験をしました。

もちろん、春秋の農繁期には、田植え、代掻き、草取り、稲刈り、脱穀など農作業も一通り、手伝いました。いや、手伝わされました。

横浜へ転居した後も、新宮とのつながりは続きます。母方の親戚が、揖保川沿いで鮎専門の割烹旅館をやっており、私たちは「浜」と呼んでいました。夏休みには兄弟三人とも「浜」で一〜二週間過ごすことが恒例でした。揖保川の大きな淵が天然プールとなり、大人も子どもも集まって、泳ぎました。鮎狩りや屋形船にもたまには乗せてもらいました。

新田山の麓の栗栖川ではカンテラを灯しての夜釣り、ヤスを持って水中で寝入っている雑魚を突くのです。新舞子の海水浴では、満ち潮で背が立たなくなり、一瞬溺れ

そうになった体験もありました。これら一つ一つがなつかしい思い出となっています。

「故郷」からは山や川など豊かな自然をイメージします。一方、山や川はなくても、街並みや小川にも思い出は生まれます。その地で充実した豊かな生活があるからこそ、さまざまな体験をした思い出いっぱいのは地になるのです。そして、その地がその人にとって故郷になるのではないのでしょうか。

十年前、兵庫県に勤務することになって、久しぶりに新宮のまちを歩きました。長い年月を経て、四十年前のわが町がフラッシュバックしてきました。同じ時を過ごした親しい仲間がいます。まさに心のオアシスであり、貴重な財産です。

変化の激しい時代を生きる子どもたちだからこそ、故郷を持つてほしいのです。だから今、元気いっぱい遊び、さまざまな体験を通して、思い出いっぱいになった「故郷」ができることを願っています。

(平成十八年十二月)

同級生交歓―丸山和也（参議院議員・弁護士）―

私たちの故郷は兵庫県の西部、西播磨。南北に清流揖保川が流れ、その中流に位置する新宮町（現・たつの市）である。

今は駅近くに移転しているが、新宮八幡神社の隣に新宮小学校があった。象徴だった運動場の椋とケヤキの大木が弱ってきているので樹勢回復の運動を進めている。丸山と私は幼稚園と小三まで同じクラスで学んだらしい。というのは、私が丸山と授業前に相撲をとっていた、よく投げ飛ばされたと言っても、よく覚えていないとしか返ってこないからだ。丸山は今の精悍な容姿ではなく、まさしく丸々とし大きかったの
で小さかった私が負けていたのは当然だ。

丸山が参議院議員をめざし運動を始めたのには驚いたが、兵庫入りをした時クラス

メイトとして街頭をともした。小学校時代の内藤（現・原）先生や当時のマドンナ内海（現・神崎）と前川（現・中西）などが応援に来てくれた。仲間はいつまでも有難い。

丸山は国政、私は県政と故郷兵庫の発展に頑張ろうと先日三宮の夜を過ごし、
して歓談した。二人とも酒はいける。

（平成二十年四月）



● 第三章 ●

やすらぎ

タウンウォッチング

「あなたの趣味は何ですか」と聞かれると、私はすかさず「タウンウォッチングです」と答える。

相手は少し首をひねり、ちよつと間をおいてから「タウンウォッチングですか……」と再度尋ねてくる。そこで私はさり気なく「街並みを見て歩くこと、散歩ですよ」と答えることにしている。しかし、大体はキョトンとした風情で「はあ」と言われる。このような繰り返しをしばしば経験している。

『タウンウォッチング』というのは、『広辞苑』にも英語辞典にもない、聞き慣れない言葉だが―バードウォッチングにヒントを得て街並みを歩くことを、こう称してみたものである。

いつ頃からタウンウォッチングを始めたのだろうか。

もう十五年程前のことになるが、毎日午前様で、しかも、会議や難しい交渉ごとが多くてストレスが高まり、朝もぎりぎりまで寝ているような生活が続いていたことがある。そんな毎日の中で、せめて休日ぐらいはのんびり歩いてみようと思ったのがきっかけだった。日曜の昼下がりに、二、三時間も歩くと結構遠くまで行けるものである。外国旅行でも、その街の雰囲気を楽しむおうとするなら絶対歩くに限る。歩いてこそ、その土地の素顔がわかるというものである。

淡路で開催された「ジャパンフローラ2000」に先立って、中国雲南省で開催中の「世界花博」を見る機会があった。そもそも雲南省は世界の植物の原産地、宝庫といわれており、「淡路花博」にもサクラソウやハスなどの貴重な原種を出展してもらった。その中心の街が昆明である。

私は昆明に到着すると早速、市内探訪に出かけたのだが、まず何よりも、街路の大きいことに驚かされた。幅広い道が車道、自転車道、歩道に整然と分けられ、その間にマロニエの街路樹と色とりどりの草花が植えられているのである。地元の人に尋ね

ると、これらの草花の世話は夜中のうちにやっつけてしまおうということだった。「花博」開催中ということもあるのだろうが、とにかく、花にあふれた美しい街という鮮烈な印象を植えつけられる素晴らしい街であった。こうした得難い経験も、歩いておればこそのことと思わずにはいられない。

最近、兵庫県では、「まちづくり基本条例」を定め、〃人間サイズのまちづくり〃を進めている。

これは、どちらかといえば機能的、画一的に過ぎた今までのまちづくりの反省に立って〃安全と安心、魅力ある〃新しいまちづくりをめざす試みである。

つまり、住居地域、工業地域、港湾地域、商業地域などと用途別にゾーニングして、その用途にに応じて、人や物が行き来するまちづくりを進めるというのが従来のもちづくりの手法であった。これに対して、人々が暮らしている地域を中心に、住居や都市的賑わい、商業施設などが重層的に入り交じって配置されているまちこそが、人間らしい生活空間なのではないかという視点から、〃人間サイズのまち〃という装置をつくろうという発想に立っている。いわば、生活者の視点でのまちづくりを提唱してい

るもので、政府が進めようとしている「歩いて暮らせる街づくり」と軌を一にする試みだともいえるだろう。

アメリカの建築家で、ニューヨークのハーレムの再生を指導したジェイコブスは、次のように「都市再生の四原則」をあげている。

第一は人と人の接触の多いこと、第二に道が狭く曲がっていること、第三に古い建物が残っていること、そして第四はゾーニングしないことである。住居や商業など用途が重なり、新旧の建物が混在し、小から大までのスケールが様々であることが、安全で、文化的な人間中心の都市の特性だというのがジェイコブスの主張である。

街は、そこに住む人の自由度が大きくて自主的に行動が選択でき、楽しめるものでなければならぬと思う。そして、人間らしさにあふれ、内と外がすぐに転換できるなど、その可能性が高いこと、お任せでなく、オーダーメイドであることが必要だとはいえないだろうか。

街を歩いてみると、街の顔、その表情が見えてくる。「あれ。あの角にステーキ屋ができたぞ」、「あれ。あの家は庭をいじったぞ」、「あれ。駐車場に家が建ったぞ」、「あ

れ。空き地が小公園になったぞ」などと、いつも新たな発見がある。街が生きていることが観察できる。そして、街が対話してくれる。問いかけてくれる。楽しませてくれる。包み込んでくれる。

皆さんも、街を歩いてみませんか。それぞれのやり方でのタウンウォッチングをお薦めしたいものです。

(平成十三年六月)

私のベスト3

昨年、求められて「私の好きな兵庫・ベスト3」を選びました。

まず、少年の日を過ごした新宮を流れる清流揖保川の鮎。

自然の営みに感動した氷ノ山のブナ林。

そして、五度目の完走を果たしたばかりの六甲山の縦走。

皆さんも、兵庫の素晴らしい自然、多様な文化、多彩な地域を思い浮かべながら、「私のベスト3」を選んでみられてはいかがでしょう。

そうした「私感覚」ともいえるべきものに根ざした、それぞれの思いが共感しあって生まれてくるもの。それこそ、私たちが新しいふるさとにほかなりません。

ふるさととは人々の安全と安心を支えてくれます。高齢者の元気や子供たちの大きな

志、社会の活力を育みます。

ふるさとは、多彩な交流を通じた自然や人、社会との共生、そして参画と協働で培い、創り上げていく私たち一人ひとりの心の拠り所です。

そこに暮らす人々の生活が豊かで充実し、そこに住んでいることがうれしくなる、そのようなふるさと、美しい兵庫づくり。

新しい年を迎え、私は、皆さんと共に、兵庫の未来を力強く拓いていきたいと思いを新たにしています。

(平成十五年一月)

桜花あれこれ

今年の桜花は例年よりも少し遅かった。今年の冬は暖冬だったので一時は早咲きかと予想されたが、三月の冷え込みのためか、遅咲きでしかも長持ちしてくれた。このため学校の入学式や四月中旬の諸行事にも花を添えてくれたことは嬉しい。

桜花の開花にもトリガーがあるらしい。単に暖かくなるだけでは季節の変化を感じることができず、まだ春と自覚しないようだ。やはり厳冬の寒さがあってその後暖かくなることにより春近いとの変化を感じて開花へのスタートを切ることになるのだから。今年の桜花はこのような経過から遅咲きとなったのだそう。

私の桜木が神戸西神中央公園の一角に植えられている。もう六年前になるが、西神中央自治会の皆様といっしょに植樹した一本である。この地域の皆様が「桜守りの会」

を組織され、一本一本丹精を込めて手入れされているお陰で毎年桜花を楽しむことができる。

今年も四月七日に「桜祭」が行われている機会にマイチェリー（私の桜）の花見と洒落こんだ。私も「桜守りの会」のメンバーに何もしていないのに入れてもらっている、今年の制服、カーキ色のエプロンと帽子をかぶらせてもらった。

残念ながら当日はまだ三分咲きか、チラホラとしか咲いていなかったが、毎日の丹精のお陰で、太い幹と多くの枝ぶりの雄姿の中に花が見られたのは、何か誇りすら感じた。懐かしいものだ。

生田神社で毎年「曲水の宴」が行われている。平安時代の雅の再来である。池の水路に杯が流され、最初の杯が流されてから次の杯が流れるまでに一首歌を詠み、杯に乗せて提出する。この歌が詠まれて披露されるのが基本的仕組みである。今年のお題は「桜」。まさしく春にふさわしいお題だった。私の詠んだ歌は、

人々と植ゑし桜が懐かしき 何時咲かんかと今日を待たれる

である。この歌と比べるのは恐縮だが、

願はくは花の下にて春死なむ そのきさらぎの望月のころ

は西行法師の歌であるが、桜の花の咲き誇る様を見るとこのような吸い込まれるような感覚に襲われるのではないか。私も西行法師の受け取りが理解するような年齢になったのかも知れないが、ともあれ百花爛漫の桜花の美しさをめでた歌として大好きである。

皆様の桜狩りは今春は、如何だったのでしょうか。それぞれ楽しまれたことでしょうか。桜花は日本人の心を揺さぶりますね。

(平成十九年四月)

九回目の六甲縦走

練習

今年は本当に自信がなかった。というのは、二回、しかも半日ずつしか練習していなかったから。最初の練習は九月二十日だったが、須磨浦から摩耶山を目指したのだが、高取山で本当に消耗してしまい、かろうじて鴨越までたどり着いたていたらくだった。原因は判っている。何より前日の深酒が過ぎていいるから、とは思ったものの上り坂が続くとてきめん、体が自然の反応をしたといえる。このときも高取山の前の石段はかなり簡単にいけたのに正直なものだ。

二回目は、鴨越から摩耶山をめざして、このときは前夜気をつけたこともあり、少しかからだ重かったが何とか菊水、鍋蓋、市が原、摩耶、青谷、新神戸までかなりの

スピードでこなすことができた。しかし、何度登ってもきつくてつらい山登りの醍醐味を味わえるのは菊水山だ。登り口に看板がある。「これより山頂900m」と書かれてあり、「よし」と発奮するのだが、約二十〜二十五分間の登りづくし。私は休憩をとらないように気をつけている。

遅くてもよい。ウサギとカメとのタイプがあるとするれば、必ずしもウサギが早くはない。実感している。カメスタイルで休まず弛まず一步一步を積み上げた方が結果として早いことが多いのだ。何故か。息切れして例えば三分休憩したとする。その間カメスタイルは一步一步積み重ねている。百や二百メートルくらいはすぐに追いつき追い抜かれてしまう。今回も、六甲分岐点から下りの宝塚までの間、小グループを二〜三ほど追い抜いたが、大平山のいつものように休憩する道路沿いで休んでいるうちに抜かれてしまった。カメは強い。

スタート

今回は、スタート地点に行ったのが午前四時半であったが、すでに列は坂道を下り

きつて2号線歩道まで連なっていた。県庁チームの仲間が待っていてくれたので、それでも中間ぐらいに並ぶことができた。スタートは五時からだったが、私たちのスタートは五時二十二分になってしまった。

渋滞

このスタートの十分程度の差が大きく影響してくることになる。須磨アルプスと高取山、その前の階段での混雑がまさしく昨年と比べて二十分程度遅れを作ってしまった。しかし、渋滞もいいこともある。高取山や菊水山など縦走の難所がいくつつかあるが、自然と休み休みしながら登ることができるので、私のように登りが苦手な者にとってはエネルギーの消費が少なくて助かるということもある。しかし、少し遅すぎたといえるか。

摩耶山頂

摩耶山頂の掬星台に着いたのが一時過ぎ、結果として再スタートは一時二十分頃と

なってしまった。しかし、頂上でのボランティアの皆様のホットレモンの美味しいこと、疲れが一気に取れる思い。感謝します。

山歩きには水分の補給とエネルギーの補充が欠かせない。既に出発時からスポーツ飲料五百ccを二本持っていたが、市が原までになくなり、お茶を一本補充したが、これも食事で飲んでしまい、またお茶と水を補充した。それに、体力が極度に落ちてくるとおにぎりも喉に入らない。既に菊水山山頂で一個食し、鍋蓋山でミカン一個を、市が原でビタミンゼリーを食べていたが、摩耶山頂ではおにぎり一個しか入らなかった。せっかくのおかずも卵焼き二切れのみ。これからが思いやられる心境だった。

六甲山

これから六甲最高峰の先の宝塚へ下りる分岐点まで延々歩かねばならない。三分の二が自動車道のアスファルト道、三分の一が山道であるが、摩耶山にまでかろうじてたどり着いた身としては、この山道での坂道のきついこと。アゴニー坂の下り道の風化花崗岩の入り交じった急峻な道には膝が踊りかねない。また、丁字ヶ辻までの登り

は、ヘトヘトになっているだけにものすごく厳しい。

今回は、例年、陵雲台の六甲ガーデンテラスでソフトクリームを食べるのだが、二十分の遅れを取り戻すために我慢することにした。そのかわり、大変うれしかったのが、六甲山郵便局の甘酒サービスだった。昨年は、郵政民営化の一環として例年の甘酒サービスがなかったもので、たいへんがっかりしていたが、今年は復活していた。誠に感謝。栄養補給、二杯もいただいた。このように沿道で激励を受けることは大きな励みになる。

分岐点から

分岐点からは下りがほとんど、石ころごろごろの山道である。約十二kmだが、これを例年は二時間で下りている。今年はどうか。やはり体力が残っているかどうかの勝負である。しかも、暗くならないうちにどこまで下りることができるか。昨年は十一月十一日の前半参加だったので、日没時間まで少し間があったが、今年は二十三日だから暗くなるのが早い。途中でライトの点灯をせざるを得なかった。

ライトといえば三〇四年前までは、最終チェックポイントが一軒茶屋の近くにあつて、点灯テストに合格しないと分岐点から宝塚へ下ろしてくれなかつたのだが、今はチェックがなくなっているのか、この二〇三回チェックを受けていない。ともかく、ライトの視野は狭いので、しかも石ころまぶれ、急峻な箇所もあるとなると、飛ばせないのは当然である。

とくに、宝塚の塩尾寺までの五百mほどの下り道は、大きな石の間を縫うように下りていくのだから余程注意していかないといけないと大げがをしかねない危険を潜めている。六甲最高峰から千mを一気に下りていくのだから当然そのような箇所がいくつあつてしかるべきだ。

塩尾寺

塩尾寺からの下りは淡々としたとしたアスファルト道。しかしこれがくせ者なのだ。特に足がパンパンに張つてしまい、坂道を真っ直ぐに下りようとするとう筋肉が伸びてくれず、足が前後に進んでくれなくなる。このときは、奥手ならぬ後足でバックして

いくと何とか歩ける。私の第一回目の縦走の時はまさしくそうであった。坂道を普通に歩いて下りれない。それだけ疲労が蓄積されてくるからだろう。第二回目以降は、今回も含めてこのようなことにならないのは、身体が体験で学んでくれているからか。

ゴール

ゴールは宝塚大橋のふもと、ちょうど「若水」ホテルの前になる。今年も兵庫県山岳連盟の中島さんと神戸市の大森観光監が迎えてくれた。認定書をもらい、記念の楯、今年はやブツバキの花であった。私も九つの楯を集めたことになる。まあ、頑張ってきたものだ。仲間と六甲縦走記念の看板の前で集合写真を撮った。さぞやくたびれた顔をしていたことだろう。

今年もうれしいことは、宝塚のJ.Cやボランティアグループの皆さんが、足湯と甘酒と炭酸せんべいの提供サービスを行ってくれていた。四九度の足湯に疲れた足をつけるとキーンと頭まで温まり、疲れが吹っ飛ぶように感じる。

甘酒は身体全体を温めてくれる。炭酸せんべいは甘味補給だ。いずれもゴール、宝

塚の人たちが、神戸市主催の六甲縦走に協力して、完走者を歓迎してくれているのだ。地域連携も自主的にここまでできたと感慨深い。

山登りを何故

それにしてもどうしてそんなに辛い厳しい苦しい思いをして六甲縦走などに臨んだのだろう。登山家のマロリーは、数十年前エベレストで遭難して行方不明だった。数年前遺体が氷河とともに出てきたが、彼は「そこに山があるからだ」と言ったという。さしずめ、「そこに六甲山があるからだ」と言えばよいのだろうか。

苦しい登りを一步一步積み重ねて山頂を極めたときの達成感は何事にも代え難い。もちろん、山頂から四方を臨む景観そのものも何にも代え難いが、三六〇度パノラマは大自然の懐から街々を眼下に臨んでその雄大さやスケールに圧倒される。そのことに加えて、自分が気力と体力をふりしぼり、耐え抜いて頂上にたどり着いたという自己実現がきつと大きな満足感を与えてくれるからだろう。

九回目の縦走達成を主催者の矢田神戸市長にしたところ、以前は十回目の記念の楯

は一回り大きな立派なものだったとのこと。もっと早く達成できていればなと少し残念な気もするが、楯のために歩くのではないし、十回目の縦走達成の成就感を味わうために、よし、来年も十回目を目指して頑張ろう、とまた決意している。

(平成二十年十二月)

● 第四章 ●

つれづれに想う

二十一世紀を生きる君たちへ

父の働く姿を見て人生を学ぶ

父は揖保郡新宮町で材木の仲介などをしていました。私が小学三年生の時に、戦後復興の中心、東京周辺をめざして、家屋敷や田畑をすべて売り払い、横浜へ出ました。父にとっては人生を懸けた一世一代の大勝負だったようです。

戦後の住宅ブームもありましたが、商売にはやはり浮き沈みがつきものです。取引のある工務店が倒産すると卸した木材の集金がとどこおり、父の会社が窮地に陥ることもありました。明日までに手形を決済するため、お年玉を父に返すこともあり、幼いころから父が金策で苦労している姿を目の当たりにして育ちました。それだけに両親の世話にならないよう早く自立をして、両親に楽をさせてあげたいと思っていました

たね。

その思いもあり、大学在学中に自動車の運転免許を取得しました。今の時代のように彼女とドライブへ行くというわけではありませんよ。父の仕事を手伝うためです。三方開きの二ト車に乗って東京の木場から横浜まで材木を運搬していました。東大生が材木屋の丁稚をしているということで、珍しがられて、木場の皆さんには可愛がってもらいましたね。

父の仕事を手伝う中で、商売は買ってくださいる相手が出て初めて成立するということに気づきました。そして、相手の立場になって物事を考える習慣が身につきました。これは、県民の皆さんと共に歩む、現在の知事の仕事にも役立つていますね。

また、父は幼児期の私に絵画を教えてくださいました。父のおかげで絵を描くのが大好きになった私は、大きな模造紙に機関車の絵を描いたり、当時、多くの子どもに親しまれていた王様クレパスが主催する写生大会で、特賞をもらったことが記憶に残っています。

母はおかげ様で今も健在です。今年で八十歳になりました。知事選に私が出馬した

時も、懸命に応援してくれた母には、今でも感謝の念でいっぱいです。

心に深く刻み込まれた、新宮町の思い出

生まれは揖保郡新宮町で、小学校三年生まで過ごしました。新宮町は、そうめん「揖保の糸」の産地としても有名なんですよ。

地元の新宮幼稚園から新宮小学校へ通いました。小学校時代の私は活発な子供で、授業参観では先生がみんなに質問しても、先に私が手をあげて全部答えてしまうので授業にならないんですね。困った先生から「井戸君、黙っていないさい」なんてしかられたこともありましたね（笑）。

小学校一年生の時、担任だった内藤先生には、大変、可愛がっていただきました。月に一度、兵庫県龍野市にある先生のご実家へ習字を習いに行ったのもいい思い出です。また、テレビ番組で活躍している弁護士丸山和也君とはクラスメイトで、よく相撲をしたものです。彼には投げとばされていました。今でも、二年に一度行われるクラス会で旧交を温めています。

四年生の時には横浜へ転居していましたが、夏休みには新宮町に帰省していたので、故郷との縁が途切れることはありませんでした。心の中には、いつも新宮町への思いがありました。

地方の発展に貢献するため自治省へ

東京大学法学部を卒業するにあたって、初めは商社に入って、世界へ雄飛することを夢見ていました。しかし、父の材木屋を手伝っていましたので、入社したら材木部門に配属される可能性もありました。わざわざ商社に入ってから材木を扱うのは気が進まなかったこともあり、商社は断念しました。

私が就職活動をしていた当時は、高度経済成長のひずみとも言える公害問題がクローズアップされていました。人の生命や生活よりも、企業活動の発展を優先する風潮が少なからずあった時代で、私はそんな風潮に疑問を感じていました。

だから、特定の業界や企業とのかかわりがなく、地方・地域住民との接点が深い官庁で働いて、生活者中心の社会をつくり、地方の発展に貢献したいという思いから自

治省（現在の総務省）への入省を希望しました。

無事に入省した後、最初に赴任したのは鳥取県です。私の新人時代は、どこの都道府県でも、土地改良事業が盛んに行われていました。土地の区画整理を行い、区画変更した土地の地図と従前の土地の地図を見比べて地番をチェックするのが、とても難しく複雑な作業でした。

作業を円滑に進めるためにマニュアルを作成するなど、自分なりに創意工夫をして乗り切ったものです。それ以後、鳥取から佐賀・宮城・静岡県へと赴任しました。日本は広く、各県によって気風が異なります。「郷に入っては郷に従え」で、とけ込むように努力をしました。

仕事を通じて、組織の中で自分の能力をフルに発揮しつつも、一緒に仕事をする相手の立場を思いやって物事を考えるチームワークの大切さを、この時代に学びました。

コウノトリの郷・兵庫県

兵庫県の県鳥であるコウノトリは特別天然記念物に指定されています。一九六五年

から県と豊岡市ではコウノトリの人工飼育に取り組んでいました。しかし、エサ場である湿田の乾田化や農薬が原因で、ついに野生のコウノトリは絶滅してしまいました。

その後、コウノトリの人工繁殖を始め、野生復帰が出来る環境整備を行政と地域住民が一体となって取り組んできました。努力は実を結び、コウノトリは少しずつ増え続けました。

そして、ついに二〇〇五年の九月二十四日に豊岡市の兵庫県立コウノトリの郷公園きょうこうえんで、人工飼育で増やしたコウノトリ百十八羽の内、五羽の試験放鳥を行いました。大空高く舞い上がるコウノトリを見た時は感慨無量でしたね。放った五羽の背中には発信機を装着しており、人工衛星でコウノトリの行動の追跡調査を行います。

一度は絶滅した鳥を野生復帰させるといふ試みは、世界でも前例がありません。兵庫県のロマンあふれる取り組みに、皆さんもご注目ください。

正しい食事で健全な精神と身体をつくろう

兵庫県では「ひょうご食の健康運動」という県民運動を二〇〇三年から展開して

います。この運動は「長寿と食」をテーマに、長年、研究を続けておられる京都大学名誉教授の家森幸男先生のご指導の下で行っています。

運動は三本の柱で推進しており、一つが「ごはんを食べよう」。米飯は食事のバランスがとりやすく、脂質の採り過ぎを抑えます。栄養バランスに優れたヘルシー食品の代表選手であるごはんを積極的に食べることで、健康増進はもちろん、県内の米の生産の振興にもつながれたいと思っています。

二つ目は「大豆」です。一般に女性は長寿です。これはエストロゲンという女性ホルモンが動脈硬化を防ぐからだと言われています。大豆には昨今、注目を集めているイソフラボンが含まれ、エストロゲンと同じ働きをします。骨のカルシウム量も確保します。また、大豆タンパク質は血圧やコレステロール値も下げるそうです。県の特産品である、丹波の黒豆と播磨の白豆を奨励し、食べることを推進しています。

そして、最後は「減塩」です。現在、日本の長寿県には長野県があげられますが、その要因は県をあげての減塩運動にあります。

一九九八年の兵庫県の一人あたりの食塩の摂取状況は一日平均十三グラム。これを十

以下に抑えれば、脳卒中や胃がんの発生率の低下にもつながると言われています。兵庫県民の平均寿命は全国平均より、やや低いため、この運動で平均以上に引き上げたいと思っています。

青少年が健康な心と身体を形成するためには、毎日の食事を通じた「食育」の充実が不可欠です。食生活の乱れが非行や^レきれる^レといった問題行動の要因にもなるとい^う専門家のご指摘もあります。

皆さんも、兵庫県の取り組みをご参考に、食生活を今一度、見直してみてはいかがでしょうか。

日本の未来を担う皆さんへの伝言

若い皆さんには夢や希望、大きな志を持っていただきたいですね。目的意識を持つことで、目はキラキラと輝き出し、目標に向かって有意義な日々が^過ごせるはずですよ。

兵庫県では、小学生には自然観察や登山など自然の中で野外体験活動を通じて生きる力を養う「自然学校」、中学生には地域社会に身を投じて一週間の社会体験活動を

経験する「トライやる・ウィーク」。高校生は災害復旧などのボランティア活動で地域社会の力となり、社会への参画意識を高める「トライやる・ワーク」といった教育事業を行っています。

私は青少年の成長過程で、このような実体験と同時に疑似体験をすることは、とても重要であると考えています。例えば、人の体験談に耳を傾けること。これも人生の疑似体験です。特にご高齢の方とお話する機会を大切にしてください。皆さんの知識の引き出しが増えて、心も豊かになるはずですよ。

また、勉強の合間に読書や演劇・映画を鑑賞することで、さまざまな人生を疑似体験するのもいいでしょう。私は幼いころから映画鑑賞が大好きでした。特に、アーネスト・ヘミングウェイの小説を映画化した「老人と海」。これは大海原を舞台に老漁師とカジキマグロの死闘を描いた作品ですが、ラストはやつとの思いで老漁師が捕らえたカジキマグロが、港へ帰る途中でサメに食いつくされてしまいます。

私はこの映画を通じて、懸命に努力しても報われないこともあるという人生の厳しさや、それでも最後まであきらめないことの大切さを学びました。このように社会へ

出るまでに、さまざまな方法で人生の疑似体験をできる限り多く積まれることをお勧めします。

勉強は机の上だけでするものではありません。さまざまな体験を通じて、自分自身をひと回りもふた回りも大きくしてください。体験したことは、皆さんのこれからの人生の道しるべになるはずですよ。

(平成十八年一月)

三世代社会

私は祖父母を知らない。私が生まれた時には二人とも亡くなっていたからだ。祖父の方は、昭和の初め金融恐慌後の家業（醤油製造販売だったらしい）の失敗の後、ほどなく亡くなり、祖母の方は、その後女手一つで多くの子供を貧しい中で育てあげながら、唯一、子供の成長と祖父が手放した田畑を取り戻すことを励みにしながら、終戦直前に亡くなったという。いずれも五十代だったそうだ。何もルーツを尋ねて、皆様に披瀝しようというのではない。ことほど左様に人の寿命が短かったということである。

よく子供の頃に、中村錦之助主演の織田信長の映画を観たが、あの桶狭間の決戦に出陣する前に謡い舞う「敦盛」の一節「人生五十年、下天の中を比ぶれば、夢幻の如

くなり」と、死を前にして悲壮感が漂う中、しかし毅然と凜々しく立ち向かう青年の姿を今でも憶えている。

そこまでさかのぼらなくても、昭和二十年の平均寿命は五十歳前、四十八・九歳だったといわれる。終戦後五十数年、現在では驚異的な経済社会の進展があつて、世界一の長寿国となり、女性は八十代前半、男性でも八十歳直前の七十八・九歳に達しているといわれる。

したがって、今の子供たちにとって、おじいさん、おばあさんの存在はごく当たり前のことになっている。しかも、少子化のため両親が長男長女社会を形づくっていることが多いので、二組、すなわち父方と母方との祖父母を持つていることなど全く稀らしくなくなっている。

最近、子どもが変だとよくいわれる。繁華街ではすぐにベタリと座り込んだり、電車の中では長くもない足を広げて座ったり、逆に足底十cm以上の靴を履いてみたり……もう「敦盛」の歳を過ぎた者には、何が何だか理解しにくいことが多いけれど、二十一世紀、もう来年から始まる世紀を創っていくのは、年齢という時の流れが不可

逆であればこそ、彼たちに委ねざるを得ない。

三世代というのは、どちらから見ても良いが、親・子・孫とジェネレーションの三代にわたる違いをいうが、これからは、いや、もう私たちの社会は三世代社会に突入しているといえよう。二十一世紀は三世代社会なのだ。これは、今まで日本が経験したことのない社会といえないだろうか。二世代社会と三世代社会とはどう違うのだろうか。

一つは、ストックが非常に厚い社会ではないか。もともと戦後ゼロから出発してようやく今日に至ったのだし、六十歳からさらに二十〜三十年の人生が待つ社会は、現役時代のストックがフルに活用できる。社会全体も、介護保険や年金などセイフティネットが整備され、いわば文化的な生活基盤を支えてくれる。現役時代の蓄積である貯蓄や年金も活用できるし、いろいろのストックをもっともつと活用できるのではないか。

二つは、「青い鳥」を求めるチルチルとミチルではないが、自分の生き方を求め続けなくては、引退後の長い時間を過ごしていけないことになる。私たちは、本当の人生を老後に迎えるべきではないか。西行法師も検非遣使を辞めて、遊行の生活に旅して、自らの人生を貫いた。何も他者から評価される行動をとるといふことではなく、

自分が正しく自分であったと感じる生き様があればよいのではないか。

三つは、子供の養育についてである。自分の子供の育て方を振り返ってみて、どうも確固たる信念や考え方があって対処してきたというよりは、毎日の忙しさにかまけて、つい学校にお任せ、とくに専門家に依存することは正しいという組織分業の思想に染まってしまっているため、アウトソーシングしていることに何も反省せずに過ごしてきたのではなかったか。今更子供には間に合わないとするれば、相手には孫がいるではないか。

しかも、世代間ギャップといわれるが、先程の足を広げて座っている青年も、ひと言「座らせて」と言えばさっと席を詰める素直さを失っていないのだから、自分の経験と時代の考え方や歴史や伝統を孫にバトンタッチしていくのはどうか。親たちには少しうるさく、わずらわしいと思われるでも、孫に対する親業を一部代わることはないか。今の子供たちは、わか言えば理解る、言わねば理解らない。「あ・うん」や「男の背中」の世界ではないのではないか。

三世代社会といいながら、社会の先達のことを中心になってしまったが、長寿社会

の主要な担い手が活力を持ち、自信を持って、自己実現に邁進できる社会の仕組みを築きたいものだ。

(平成十三年十一月)

同じと違い

あの日航機事故で亡くなった坂本九さんの歌に「幸せなら手をたたこう」があります。「幸せなら態度で示そうよ、ほら、みんなで手をたたこう」だったと思います。

知らない人が一つの会場で突然一体感を持つとすることはなかなか難しいものです。皆さんも経験があたりでしょう。そんなとき、みんなでできる小さな作業が心を開かせ、心が通いあい、ほのほのとした空気が生じます。だからついには「幸せなら手をつなごう、幸せなら態度で示そうよ、ほら、みんなで手をつなごう」となるのではないのでしょうか。

このような同じ経験や体験を一つにすることが、相互理解を生み、それが仲間意識をつくりだすのだと思います。私たちは、どうしても限られた情報のもとで、今私た

ちに直接間接に収集される情報だけでなく、自分の来し方知らず知らずに伝えられている歴史や文化、そして地域の持つている風土によるものも含めて、そのうえ現在の自分の置かれている状況をベースに、判断して、行動しているのです。

したがって、どうしても偏りやゆがみが生じざるを得ないのではないのでしょうか。この偏りやゆがみを一定の幅の中に包み込んでくれるのが、私は、「共通感」だと思います。

共通感とは、どうして作られるのでしょうか。いろいろなチャンネルがあると思います。第一が同じ経験や体験ではないでしょうか。同じ土地に生まれ、育つという故郷意識、同じ学校で学んだという同窓意識、同じ職場で働くという職場意識、同じ地域で暮らすというコミュニティ意識から始まって、宗教や人種や国などの同一意識を生み出したのでしょうか。

しかし、同一意識には危険があります。その同一意識がそれ以外のものを排除しがちだからです。私たちの長い歴史や文化対立がそれを教えてくれます。

今、ようやく世界は地球時代を迎えました。地球という水惑星に偶然育まれた生物

の一種にすぎない人間が地球の王者と思いがついていたことが、二十一世紀になって、地球環境の制約で、人間も地球上の生物の一種にすぎず、地球との運命共同体である小さな存在だと気づいたのです。

地球という惑星に生きる生命体としての共通感をベースにみた場合、それ以外の同一意識の対立はいかにも小さい、ささいなものであるか気づかされます。

私は、「同じ感覚」は「違い感覚」の表裏であることと意識さえすれば、自然との共生、社会との共生、人と人との共生など容易なことではないかと信じているのです。皆様はいかが思われますか。

(平成十五年一月)

最近の歌に

最近、ビートルズが復活しているらしい。私のようなビートルズ世代だけでなく、若い人たちにも人気があるという。何故か。考えてみたが判明しない。けれど、一つ言えるのはあの高度成長前夜の未来に対する確信のようなものが世の中をカバーしていた雰囲気、ビートルズの歌には反映されているからではないか。

NHKの紅白歌合戦の視聴率が近年落ち続けているという。私も最近紅白を見続けることがなくなり、他チャンネルに浮気してしまう。このような人が多いらしい。何故か。これも判明しないけれど、老若男女の全世代に愛される共通の歌が少なくなってきたからではないか。最近の子どもたちは、童謡や唱歌など日本の歌を唱わなくなっている。学校の音楽でもあまり教えていないらしい。

日本の歌には日本の心があるといわれる。私たちが日本的なものを戦後の発展の中で、個性や自主性を強調し自由を基本としてきたが故に、見逃してきた、置き去ってきた大切なものの一つではないか。

ビートルズの歌でもよい。私たちは若い人たちと共有できる何かを意識的に創り出していかなくてはならないのではないか。しかし、あの速いラップについていけるかどうかは不安なしとしないけれど。

（平成十六年一月）

晴れ男

最近は、梅雨の晴れ間、好天が続いています。どうもおもしろいもので、梅雨入り宣言がなされると、とたんに雨が降らないことが多いという現象が出現するらしい。梅雨前線は日本列島の南側に横たわっている、大陸側の高気圧が張り出していることに伴うものという。

五月下旬、淡路夢舞台で春の花を愛でる会を開催したところ、快晴の、初夏を思わせる晴天のもとで五月の花木を楽しんでいたことができました。前日まで台風2号が四国へ上陸し、相当の雨をもたらすとの予想もあつたのですが、幸い、温帯低気圧となって太平洋沿いに進んでくれたため、雨にならず、開催することができたものです。

そういえば、高砂市の市ヶ池公園で実施したひょうご森の祭典も、悪天候が懸念されていたのに、かえって素晴らしい、暑いぐらいの晴天でした。

しかし、反対のこともあります。神戸まつりには、今年も、神戸県民局や国体局もパレードに参加したのですが、議長と私はオープンカーに乗車し、市役所南の公園から元町大丸前までの区間、昨年の阪神タイガースの優勝パレードの逆のコースをパレードしました。その間は、まさしく雨、雨の厳しいものでした。風邪を引かないように、参加者ともども注意しました。

どうも晴雨によって悲喜こもごもの事態にめぐりあうのですが、こればかりはいけません、私たちの自由にはなりません。それだけに、日頃の行状の良さが反映して好天に恵まれたとか、誰か行状が悪い方がいるため雨だとか、挨拶もいいかげんになりがちです。自然現象ですから、こんなことで過去の行状が評価されてもしょうがないのですが、行事を行う身ともなれば晴れて欲しいとの思いからか、何かのせいにしがちだということでしょう。水資源に乏しい中国では、雨は瑞兆と思われているそうですから、所変われば品変わるということでしょう。

それでも私はどちらかというと、雨よりは晴れの方が付いてくれているのではないかと思っています。先週久方ぶりで元町大丸前で街頭演説にマイクを握ったとき、それまでの雨がとたんに小雨から少しやみ、傘無しで車上に立つことができました。

その後はまた雨が降ってきたそうですから、エヘンといったところですか。自ら晴れ男を任じている次第です。これからも、照る照る坊主を用意しておかねばなりません。い。もとより、先に言ったが勝ちの感がありますが、お許しください。

(平成十六年六月)

さわやか街頭トーク

街頭演説は何度行っても大変難しい。また、行う本人にとっては結構厳しい。しかもよほど厚顔にならないとやはり恥ずかしい。そして、誰が聞いていくれるか保証もない。空に向かって叫んでいるようで何か頼りない。例えば、駅頭での街頭演説、通勤通学の人々からみると、物好きでよくようやっているわ、といいながら、歩き去るのがほとんどである。雑音としか聞こえていないかもしれない。だから、「お耳を少し貸していただきます」などとお許しをいただいているが、総じて「物好き」としか思えないだろう。

しかし、私は、知事になってからも選挙運動の延長のように、知事の街頭演説、「さわやか街頭トーク」を行っている。何故か。もとより県民に直接訴える機会は街頭演

説のほか、個人演説会やその他いろいろの場面があると思うが、やはり一番直接的な手段こそ街頭でその意見を訴えることであろう。街頭こそ民主主義活動の原点ともいわれる。アテネの民主政治の政治活動もアゴラ（広場）での演説だったはず、有権者や未来の有権者に今の県政の状況を説明し、主張することこそ知事としての立場にあるものの原点といってもよいと私自身確信している。

私の街頭演説の初体験は、五年前の小泉総理が就任して、小泉ブームの最中、大丸前で参議院議員選挙も間近ということもあって、私も前座演説の一人に加えられたのだった。いまだに評判となっているが、大丸前の交差点を中心に一万五千人ほどの大群衆が集まり、誰もが、「官から民へ」「国から地方へ」の理解りやすいスローガンを掲げ、しかも、「自民党をぶっ壊す」と自民党総裁自身が叫ばれる小泉総理をひと目見よう、その人の生の声や生の仕草を聞こうと集まってこられたその最中に、私も参加させてもらったのだった。

今振り返ると、何を話したか憶えていないが、街宣車の車上に立ってみると、数は理解らないが、人、人、人、頭、頭、頭、見渡す限りの路上が全て人で埋まっていた。

しかも、初めての大量の人を前にしての路上での演説である。ドキドキ胸は鳴るし、緊張するし、時間は限られているし、誰も聞いていないし、見てもくれないように見えるし、いやはや大変な初陣であった。

街頭演説にはもう一つ思い出がある。最初の選挙の時だったが、選挙運動期間中のこと、A市をご案内いただいた県議さんが、駅前ロータリー、商店街入口、スーパー駐車場前、県市営住宅前など人通りの多い場所を選んで、「はい」とマイクを渡されて、街頭演説をすることを強いられた。

まさしく聞いてくれる声援者はいないその中で、聞いてもらえる人、立ち止まる人、支援を送ってくれる人など全く知らない県民を相手に、いや相手も見えない空間に向かつて演説をする、抱負を述べる、政策を訴えることをすることがあった。手応えは全くない。成果は見えない。私自身もなかなか集中できないでいた。やはり恥ずかしさと、自分を売ることの経験のなさからであろう。

その県議さんをはじめ熟練した国会議員の諸先生方からいつも聞かされていたことがある。「街頭演説は聞いているようで聞いていない」、「聞いていないようで聞いて

いる」という原則があるのだそう。私自身、街頭で話を聞いてもらっている立場だけに、実情がどうなのか、私自身自ら、確認する手段はないが、ある時、全く知らないスーパリーの玄関口で街頭演説を終えて、次の地をめざしてスタートしようとしたとき、握手を求めてこられた方がおられた。

まさしく近所の方で、今まで知事候補が来たことがなかったこと、環境を維持するための県の役割に期待していること、政治団体のメンバーでもあることなどをお話された。そして「こんなところで知事候補が訴えられることに感激した」とまで言われてしまった。私自身は本当に嬉しかったし、感激した。大変な激励を受けた思い、まさしく、聞いていないと思っていたのに聞いていたのだ。やはり、きちんと自分の考えを理解してもらうために実行することが大切なのだと考えている。

ともあれ、今後も、知事の街頭トークとして、現下の県政の状況を直に県民の皆様 に訴えていく努力を続けていきたい、また、いくことが、知事としての役割なのではないかと考えながら、行っていく決意である。

どうか、駅前やスーパー前や交差点で、私の街頭トークを見かけられたら、立ち止

まらずに「何をやっているのか」ではなく「何を言っているのか」と聞き耳だけは立
てていただくようお願いする。

(平成十八年七月)

始球式

今日七月三十日、午後五時五十八分、場所は甲子園球場、観客は四万八千五百人、阪神ナインは守備へ、ヤクルトの一番は青木、キャッチャー矢野、投手は井戸、まさしく始球式が始まる。

今回は、六十二日後に始まるのじぎく兵庫国体のPRのための始球式に臨んだ。いつもは阪神タイガースのユニフォームで背番号は18だが、今度は国体の炬火リレーのユニフォームで出場、白のTシャツに背中に「はばタン」、胸に五つの国を象徴する火のデザイン、トレーナーは青と決めている。

何故、いつもは背番号18かというと、三年前、阪神タイガースが星野監督のもと、十八年ぶりに優勝したが、初めて甲子園球場で始球式をしたときは、十八年ぶりの優

勝がかかっていたので、この数字をいただいたのが理由で、縦じまのユニフォームを着用するのが基本パターンだったのだ。ただ、いつまでも18番を続けるのは、阪神タイガースに悪い。もう実現したのだから。したがって、今回、国体の炬火リレースタイルにした訳だった。

ワインドアップはしない。だって、練習も十分にしていないアマチュア投手が投げるのだから、足の移動で身体の軸が少し動いてしまう。いままでの経験で学んだ。したがって、普通ランナーが出た時のための投球フォームであるセットアップでプレートに右足を据えて、一呼吸おいてグラブとボールを真上に上げて、一旦胸に構え、そして、振りかぶって投げる。これだと、身体があまり動かずに投球に集中できる。

初めて甲子園球場で始球式をしたのは、あの十八年ぶりの優勝をした年の七月だったのではなかったか。阪神中日戦だった。当時の星野監督からピッチャーマウンドが少し高いので、普通に投げるとどうしてもワンバウンドになってしまう。だから、キヤッチャーの頭の上あたりをめがけて投げるのがちょうど良いのだというアドバイスをいただいていた。が、五万人の大観衆、しかも、審判からボールを手渡されて一球

の練習もなく、プレーボールの掛け声とともに直ちに投げるしかない。

頭の中は真つ白、すっかりそのアドバイスを忘れてしまった。しかも、ワインドアップで投げたのだからたまらない。案の定、力も入ったのだろう、スピードはまんざらではないが、ただ、キャッチャーの構えるミットしか目に入らず、せっかくの星野監督のアドバイスは生かされず、ショートバウンドになってしまった。残念なこと。やはり、アドバイスどおりとしていたら、絶妙のストライクだったはず。

さて、主審から受け取り、セットアップで構えて、いつもより気張らずにキャッチャーの頭を念頭にままよと投げる。ボールは弧を描いてキャッチャーミットへ。青木選手は礼儀により空振り、ボールはストライクゾーン外角少し高めのボールだったろう。観客からは、ストライクと思えたのかもしれない。スピードはまずまず、百_キ程度ではないか。「ウォー」というどよめきがあがったし、阪神ベンチでも拍手があったというからまんざらでもない。

試合結果は、阪神対ヤクルト三対三の引き分け、すごい熱戦であった。

(平成十八年七月)

健康法

内臓脂肪症候群（メタボリックシンドローム）に要注意

私の朝は手足の運動から始まる。ふとんの上でまず手のグーパーを繰り返す。次に足首を立てる。そして腹筋の屈伸、足抱えがセットである。起き出してからは、手の延伸、首廻し、腰廻し、スクワット、捻転など一連の運動メニューをこなす。概ね三十分程度の時間を費やしている。

目的は、体重を減らし、ウエストを減らしたい、肥満対策である。内臓脂肪による肥満は、糖尿病、高血圧、（メタボリックシンドローム）対策である。内臓脂肪による肥満は、糖尿病、高血圧、高脂血症の生活習慣病になる危険因子を持っている可能性が高い。しかも、一つひとつはちよつと高めであっても、複数が重なり合うと動脈硬化を急速に進行させるらし

い。

内臓脂肪の蓄積は、過栄養と運動不足が大きな原因である。肥満になると、インスリンが効きにくくなるインスリン抵抗性が増し、高血糖、高血圧を引き起こす。また遊離脂肪酸が増え、中性脂肪も増えて血液がドロドロになる。いずれも動脈硬化を引き起こし、脳卒中、心筋梗塞、動脈瘤などの原因ともなる。

ウエストの周囲を測ってみよう。おへその周りである。くびれのところではない。男性なら八十五センチ、女性なら九十センチ以上あれば要注意。内臓脂肪は、特に中高年の男性にたまりやすいといわれている。女性の場合は、閉経後が要注意。生活習慣病の危険が高いのがこの内臓脂肪型の肥満だそう。皮下脂肪がそれ程ついていない、外見からはわかりにくくても、ウエストサイズが増えてきたら要注意である。

内臓脂肪を減らすには、簡単なこと、食べすぎない、適度な運動をする、酒を飲みすぎない、禁煙など生活習慣を見直せばよい、とされている。とはいいながら、これがなかなかできないのが実情である。

自分自身の健康法を持つ

私の健康維持は、実をいうと、毎年秋の「六甲縦走」に参加し、完走することを目指して健康プランを立てている。今年も、八回目の縦走をすることができた。少なくとも十回は完走したい、これが願いである。このため、もちろん、二〜三回の縦走コースを事前に歩くが、毎日心がけているのは、エレベーター、エスカレーターを使わずに階段の昇降である、執務室が六階にあるので、一日三回は往復している。これも健康法の一つになっている。

健康マイプランを実践し、自分自身の健康法を実行していこうではありませんか。

(平成十九年十二月)

月への思い

冬の夜空にぼつかりと浮かぶ月の皎々とした輝きに胸をとどろかせた経験が、誰にもあるのではないか。満月でもよい、三日月でもよい。しかし、もう少しで満月となる十三夜の月や満月を少し過ぎた十六夜の月などは、しみじみとした感慨を与えてくれる。十三夜は、もう一步で達成できる、頑張れとの呼びかけのように見えるし、十六夜は、阿仏尼ではないが、何かこれから大切な生き様をきちんと示してくれよとのメッセージに聞こえる。

月といえば、ウサギの餅つきだとか、カニだとか陰模様が言われてきたが、月面があのクレーターでおおわれたあばた顔であるとは驚きであった。どうしてあんな月面になったのかはともかく、私の長年の夢は、教科書の写真で見た月面を天体望遠鏡で

ぜひ見たい、自分の目で確認したいとの願いであった。ようやく叶ったときには、年齢もう四十になっていた。蓼科の小さな小屋を借り、時々でかける機会があった。流石に高所、満天の星から降り注ぐ精気を感じながら、全星を支配しているような皎々とした月を見たとき、どうしても小さくてもよい、夜空を見ることができると望遠鏡がほしくなった。ベランダに据え付けて、月を見たときの感激。見える、見える。夢が叶った。

晴の海あたりは小さな輪の集まりだが、ずらしていくとクレーター、山脈が見える。せいぜい二十倍ほどのものだが、自分の目で確かめることができたということの感激の方が大きかったかも知れない。しかし、今はもう十数年、蓼科を訪ねることもないので、この望遠鏡とも縁遠くなってしまった。

月といえばアポロ宇宙船。アームストロング船長の「私にとっては小さな一歩だが、人類にとっては大きな一歩となる」という地球への月からのメッセージには、人類の科学技術への大いなる信頼と可能性があった。その後の経過もめざましい。太陽系でも、冥王星が惑星からはずれたと思ったら、さらに外に新惑星が太陽を回っているの

ではないかとの予測が出ている。限らない宇宙のように、発見も限らないものだ。

「なゆた」が、反射鏡にサビが出て、再メッキをすることになった。我が望遠鏡も放ったらかしだから、今どうなっているか理解らないが、「なゆた」には、来年が世界天文年だけに、その活躍を期待したい。それだけに、早く修復して、素晴らしい二メートルの威力を発揮して欲しい。そして、私の願い、月のクレーターを「なゆた」で見えることを、いつか叶えられたらと願っている。できるだろうか。

(平成二十年四月)



いど としぞう
井戸 敏三

略 歴

昭和20年 8月10日生まれ

出 身 地 兵庫県揖保郡新宮町
(現たつの市)

昭和27年 4月 新宮小学校入学

昭和43年 3月 東京大学法学部卒業

昭和43年から 鳥取県、佐賀県、宮城県、
静岡県、国土庁、運輸省、
自治省に勤務

平成 7年 自治大臣官房審議官

平成 8年 兵庫県副知事

平成13年 兵庫県知事

平成17年 兵庫県知事 (再選)

趣 味 山歩き・タウンウォッチング

この冊子は、本会が歩みを共にする井戸敏三氏をよく知っていただくために、「新生兵庫をつくる会」会員の討議資料として編集したものです。編集に際して、井戸敏三氏の著作に加えて新しく執筆をお願いしました。

これまでとこれから

2009年1月発行

著 者 井戸 敏三

編集発行 新生兵庫をつくる会

〒650-0012 神戸市中央区栄町通4-2-18
キンキビルディング5階 ☎078(362)1700

装 幀 芳野 恭輔
